

椿の結實促進について

第二報 椿の花芽分化について (予報)

林業試験場熊本支場

豊林 枝 昌 石 崎 厚 美

尾 方 信 夫

I. 緒 言

特用樹種として有望な椿について、その基礎的研究の一部として花芽の分化期に関する実験を行った。

II. 材料及実験方法

供試木は第一表の如く種々の条件に分けて選定し、1950年7月7日より各供試木毎に20の芽を採取し、75% Alcohol 中に浸漬時蔵した。実験に際しては、各芽毎にノギスに依り、長さ、厚を測定し、解剖顕微鏡(×20)下にて解剖針に依り、芽の鱗片を一枚毎丁寧に剥き取り、初生生長点を取り出し検鏡し、併せて顕微鏡(Olympus × 150)を使用した。

第一表 供試木一覧表

所 在 地	推定樹令	摘 要
No1~No11 熊本市 井井	30年	開放地、生垣の如く方形に植栽
No12~No14 〃 牧野	25年	鬱 岡 林 内
No15~No19 〃 〃	30年	東側竹藪、西面開放
No20 〃 水石	30年	南面開放
No21 〃 〃	12年	〃
No22 〃 京町本町	25年	開放地孤立木
No23 〃 〃	25年	北面傾斜地
No24 〃 〃	45年	北面開放地

III. 花芽分化期

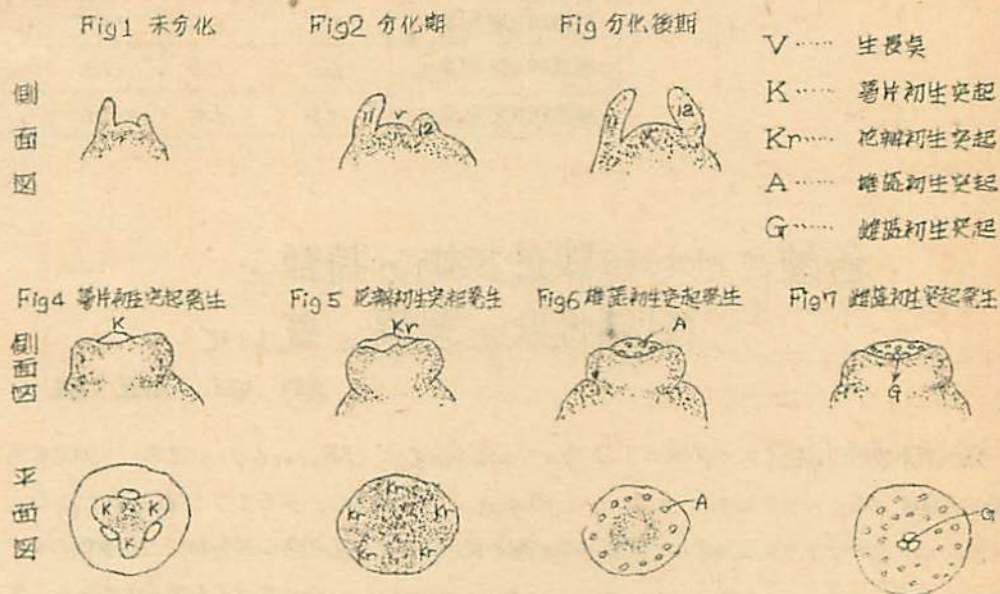
1. 分化初期に於ける花芽の標徴

椿の花芽に於ては、分化前に生長点部の形態は平坦状を呈し (Fig 1)、その生長点部が次第に隆起した時は (Fig 2)、既に花芽分化の初期徴候と思考される。次いで生長部の表面が平坦状になつた時 (Fig 3)、之を分化後期と見る事が出来る。そして尚も平坦面に於ては生長点部稍々三角形に近い形となり (Fig 4)、その三つの頂点部が隆起し、縦断面図に於ては生長点部の外周が隆起し、鱗片初生突起が形成され、花芽分化は完全に終る。次いで花弁、雄蕊、雌蕊の順に外方

より内方に向つて附属器官が形成される。

以上の如く 植物の花芽分化の状態は、山口氏の研究による苹果、梨、梅の花芽分化の状態と一致する。

11.12. 外部から数えた鱗片
順位



2 分化時期について

資料採取の時期が遅かつたので分化時期を確定することが出来なかつたが、各供試木毎に器官発生の状態を試花芽数に対する百分率で表示して分化の状態を定め、又器官形成の速度より逆算して分化時期を推定すると分化開始より分化終了迄5—11日間を要して居り、本実験に於ける分化開始期は6月31日より7月7日の間で、熊本市近郊の植物の花芽分化期は6月31日と推定する。

3. 立地条件の差異と花芽分化期

立地条件の差異によつて花芽分化期に^{遅延}があり、分化開始期は光線の作用が最も大きく、他の立地的条件、供試木の樹勢、樹令等の条件が同一であるならば、光量に比例することが分る。尚開放地で水が継続的に与えられ乾燥の作用が充分であつても、土壌中の水分含有量が異なる事に依つて分化開始期は後れる。

IV. 花芽の発育過程に於ける外部形態と
内部形態との関係

器官形成の各時期毎の形状比(幅/厚/長)及び長さのモードを表示すると次の表の如し。第一夜に依つて雄蕊初生突起発生に至る迄は幅、厚さの方向に於ける生長より長さの生長が旺盛

第二表 花芽の發育状態と形状比及び長さのモード一覽表

で、花芽初生突起發生の頃から穂
 長さの方向の生長が顯著に有る。

發育状態	モード		長さのモード
	幅	厚	
未分化	95	75	0.45 cm
分化	85	65	0.45
萼片初生突起發生	75	65	0.55
花瓣初生突起發生	75	65	0.65
雄蕊初生突起發生	65	55	0.65
雌蕊初生突起發生	75	65	0.75

各種とりもち製造技術の特徴と 製品性状の差異に就いて

原田 盛重

静岡茨木林内には多くのイヌツケ (*Ilex crenata*, Thunb) が生育し、附近民有林には違ひなくモチノキ (*Ilex integra*, Thunb), タラエフ (*Ilex latifolia*, Thunb) 等の生育するを認る。又宮崎県と熊本県の梁瀬にある市房山国有林中には多数のヤマタリマ (*Trochodendron aralioides*, S. et Z.) の生育するを認るのである。余はこれらのとりもち樹を試材材料としてとりもちの製造試験を行ったのであるが、各種とりもち製造技術の特徴と製品性状の差異に就て述ぶれば次の通りである。

I) 樹皮採取時期

ヤマタリマは4月上旬より7月下旬迄、イヌツケは9月下旬まで、モチノキとタラエフは8月中旬迄を適期とするのである。

II) 溜池及び浸漬作業と樹皮の腐敗程度

(1) 溜池の大きさは約3000畳の樹皮を溜けるためには20坪を、その深さは50cm位を必要とする。冷水を直接溜池に入れず、その側に溜を設け、その中で一応暖ったものを溜池に導き入れるようにすれば効果的である(9月26日午後3時測定: 湧出水の温度17°C, 溜の水温19°C, 溜池の水温22°C)。

(2) 樹皮を溜池に溜けるのは梅雨前を適当とし、梅雨前ならば2~3ヶ月で腐敗するものが梅雨後であれば6ヶ月を要する。

(3) 剥き取った大きな樹皮を束にしてそのまゝ池に溜けるよりも小片となし皮依に入れて溜けた方が腐敗が速かに早い。

(4) 溜池に溜ける前に必ず樹皮の外面に着いた苔を除去する。さもなくば製品の品質を悪くする。